論　文

ポール・M・スウィージーと資本主義発展の理論

―― ローザ・ルクセンブルク受容と世界経済 ――

古　松　丈　周

要　旨

本稿は、ポール・M・スウィージーの資本主義発展論を、彼のローザ・ルクセンブルク論の検討を通して明らかにするものである。ローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』は、資本主義の枠内での資本蓄積の可能性を否定し、剰余価値実現のための需要を非資本主義世界に求めた。この理論は多くのマルクス主義者によって否定されてきたが、スウィージーはこの理論を否定しながらも、彼女を高く評価し、彼女の問題意識を引き継ぎながら自らの理論を構築していった。初期の主著『資本主義発展の理論』のローザ・ルクセンブルク論、そしてローザ・ルクセンブルク『資本蓄積論』のイタリア語版によせた序文にはルクセンブルクに対する批判とともに、彼女の問題意識をどう引き継ぐかという問題意識が示される。そして『資本主義発展の理論』の16章「世界経済」では、ルクセンブルクの理論を世界経済分析に発展させ、非資本主義地域が資本主義地域の資本輸出の対象となり、資本蓄積の源泉となることを明らかにしたのである。

キーワード：ポール・M・スウィージー；ローザ・ルクセンブルク；資本蓄積；資本主義発展；世界経済
経済学文献季報分類番号：01-21；02-28；02-31；02-43；03-49

はじめに

ポール・M・スウィージー（Paul M. Sweezy：1910-2004）は、ポール・A・バラン（Paul A. Baran：1910-1964）とともに、第2次大戦後、『マンスリー・レヴュー』を中心に、アメリカのマルクス経済学を牽引してきた。そのスウィージーが1942年に発表した『資本主義発展の理論』は、マルクス主義文献になじんでいない読者を対象に書かれた「入門書」である。しかし、入門書であると同時に、十分に総合的な分析的研究を意図して書かれたものである。ここで、スウィージーが「資本主義発展の理論」として提示しようとするのは、資本主義を終焉へと導く法則を検討しその傾向を理論化することであり、その一方で、その終焉への傾向を押しとどめ、延命させている政治的、社会的、経済的諸要素を分析することである。これらのテーマは、それぞれの研究で力点の置き方に違いはあるにせよ、スウィージー、そし

てバランが常に問題としてきたものであり、彼らの研究に枠組みを与えるものであった。

この本で、スウィージーが資本主義を終焉に導く傾向のなかでも、「すべての現実の恐慌の究極の原因」、慢性的不況の原因と考えるのが「過少消費」である。過少消費説は、一般に恐慌などで顕在化する資本主義経済の矛盾の原因を、過剰生産、ないしは消費の不足に求める説から、生産の増大に比べて消費の増大が少ないことを示すものまで幅広い。過少消費説を唱える論者も、マルサスやシスモンディからホブソン、ケインズまで、幅広く数多い。スウィージーは、当時の恐慌論を整理し、資本主義崩壊論争、慢性的不況をめぐる議論を検討した上で、この過少消費を資本主義を終焉に導く傾向と考えたのである[1)]。他方で、過少消費に向かう傾向を押しとどめ、あるいは相殺することで資本主義の終焉を回避するために出現したのが、独占資本に基礎をおく帝国主義である。そしてこのような枠組みをスウィージーに示したのが、彼が「過少消費論者たちの女王[2)]」とよぶローザ・ルクセンブルク（Rosa Luxemburg：1871–1919）である。

本稿の課題は、スウィージーの資本主義発展の理論を、彼のローザ・ルクセンブルク論を通して検討することである。現在、『マンスリー・レヴュー』の編集を続けるフォスターは、マルクスの政治経済学とマクロ経済学批判を統合し、独占資本主義、帝国主義論にも関連するバラン、スウィージーの研究は、ローザ・ルクセンブルクの研究に批判的にもとづくとき最もよく理解できるという[3)]。

以下では、まず『資本主義発展の理論』におけるスウィージーのローザ・ルクセンブルク論の論点を敷衍した上で、バランのスウィージー批判とそれに対するスウィージーの応答を検討する[4)]。それにより、ルクセンブルクの誤謬の第一の側面、すなわち資本主義的な蓄積

1）スウィージーは『資本主義発展の理論』において、恐慌を二つの型に分類しており、それが「利潤率低下傾向と関連する恐慌」（第 9 章で検討）と「実現恐慌」（第 10 章で検討）である。そしてこの「実現恐慌」の二つの型を取り上げており、ひとつが「不比例から生ずる恐慌」（第 10 章 1）で、もうひとつが「過少消費から生ずる恐慌」（第 10 章 2）である（cf. Sweezy, Paul M., *The Theory of Capitalist Development：Principles of Merxian Political Economy,* Monthly Review Press, 1942. 都留重人訳『資本主義発展の理論』新評論、1967 年）。

2）*Ibid*., p. 171. 邦訳書、211 頁。

3）Foster, John Bellamy, Polish Marxian Political Economy and US Monopoly Capital Theory: The Influence of Luxemburg, Kalecki and Lange on Baran and Sweezy and *Monthly Review,* Bellofiore, Riccardo, Karwowski, Eva, and Toporowski, Jan（ed）, *The Legacy of Rosa Luxemburg, Oskar Lange and Michal Kalecki：Volume 1 of Essays in Honour of Tadeusz Kowalik,* Palgrave Macmillan, 2014, p. 107.

4）バランとスウィージーは、ともに緊密な議論の上に彼らの理論を構築していった。ブリューワーはスウィージーの『資本主義発展の理論』からバランの『成長の政治経済学』、そして共著の『独占資本』への展開について、「それ（古典的マルクス主義）とは明確に異なる何者かへ向かって展開するという持続的な理論の発展の筋道が認められる」と言っており、「彼らが示している思想の総路線についてどちらが原著者であるかを決定しようと試みることは、むしろ無意味なことである」と指摘している（cf.

体制を維持するために必要とされる非資本主義地域について、スウィージーの見方が示されることとなる。次に、1959年に執筆されたスウィージーのローザ・ルクセンブルク論を検討する。ここでは、ルクセンブルクの誤謬の第二の側面、すなわち資本主義の枠内での蓄積不可能性の主張の持つ意味が検討される。ルクセンブルクが修正主義との闘いにおいて、この理論に固執し続けた理由を明らかにすることで、この理論の誤謬にかかわらず、ある積極的な意味を持ち得たこと、そしてその限界が示される。次に、それらを下敷きとして、再度、『資本主義発展の理論』における世界経済、帝国主義についてのスウィージーの分析を検討する。これらの作業を通して、スウィージーの資本主義発展の理論が、現在のグローバル資本主義分析において持つ意義の一端が明らかになると考える。

第１章　非資本主義体制下での剰余価値の実現

スウィージーは『資本主義発展の理論』において、ルクセンブルクを取り上げ、批判的に検討している。なかでもスウィージーが着目するのは、「蓄積された剰余価値にたいする需要はどこにあるのか[5)]」というルクセンブルクの問いである。単純再生産であれば、剰余価値の実現に何の問題もない。剰余価値の実現には、資本家が消費すればよい。しかし、拡大再生産における剰余価値の実現には困難が伴う。社会総産出物の価値は、不変資本プラス可変資本プラス剰余価値で構成される。不変資本は資本家の補填用購入、可変資本は労働者の賃金支出で実現される。しかし剰余価値を実現するには資本家の消費以外の部分は蓄積されるが、この蓄積される部分を実現するための需要が存在しないのである。労働者の賃金は、可変資本の実現により使い尽くされる。資本家の消費が蓄積部分の需要となれば、単純再生産となってしまう。それゆえ、ルクセンブルクはこの問題の前提、つまり資本家と労働者からなる封鎖的体制という仮定を否定することになる。剰余価値部分を実現するには、非資本主義的消費者への販売が必要となると考えたのである。

非資本主義的消費者とは、資本主義化されていない国、地域の消費者、あるいはその消費

Brewer, Anthony, *Marxist Theories of Imperialism：A Critical Survey,* Routledge & Kegan Paul, 1990, p. 137. 渋谷将、一井昭訳『世界経済とマルクス経済学』中央大学出版部、1991年、160頁）。しかし、近年では、フォスターが、彼らのライフワークとなっていた『独占資本』執筆過程での、バランとスウィージーの対立点をあげている。「(1)アメリカにおけるファシズム、(2)ソースティン・ヴェブレン、(3)過少消費、(4)ローザ・ルクセンブルク、(5)帝国主義、(6)中ソ対立」である（Foster, John Bellamy, Baran, Nicholas（ed.）, *The Age of Monopoly Capital: Selected Correspondence of Paul M. Sweezy and Paul A. Baran, 1949-1964,* Monthly Review Press, 2017, p. 34f.）。

5）Sweezy, *op. cit.*, p. 202. 邦訳書、252頁。

者たちの属する人口部分が単純商品生産の水準にあるなど、資本主義体制の外部にいる消費者である。しかし、拡大再生産の過程はこれらの地域や人口層の消費者を資本主義に引き込んでゆく。そしてすべてが資本主義に吸収されたとき、この体制はそれ自身の力で崩壊するのである。帝国主義とは、非資本主義世界の支配権を獲得しようとする闘争であり、各国が自国内の非資本主義的国内市場に他の資本主義国が侵入することを防ぐために高率の保護関税が必要となるのである。

以上のようにルクセンブルクの主張を整理した上で、スウィージーはこの理論がいくつかの角度からの批判を免れないという。とくにスウィージーが問題視するのは、ルクセンブルクが拡大再生産を論じるさい、単純再生産の前提を保持していることである。スウィージーは以下のように言っている。

「労働者の消費は何らの剰余価値をも実現し得ないという、彼女が一瞬も疑問としなかった独断は、可変資本の総量、したがって労働者の消費も、単純再生産におけるように、常に一定不変でなければならぬことを意味する。実際には、蓄積は典型的には可変資本の増大を含み、そしてこの追加的可変資本が労働者によって消費されるさいに、それは消費財という物質的形態をとった剰余価値の一部を実現するのである[6)]」。

スウィージーによれば、ルクセンブルクは資本主義の枠内では消費は増大しないと考えたのであり、そこにルクセンブルクの最大の誤謬があった。資本主義体制下において、剰余価値を実現することは可能なのである。

再生産表式の混乱については、これまでも議論されており、これ以上の検討は必要ないであろう。しかし、スウィージーはさらに、以下のように言っている。

「当面の目的のためには、かりに封鎖体系における蓄積の可能性を否定する分析が正しいとしても、彼女の非資本主義的消費者は、決して事態を変えることはできない、ということを指摘するだけで十分である。非資本主義的消費者の販売とても、彼らから何かを購入することなくしては、不可能である。資本主義的流通過程にかんするかぎり、剰余価値はこのような方法では処分されえない。せいぜいのところ、それは形態を変えうるだけである。非資本主義的環境から「輸入された」商品を誰が購入するのであろうか。もしも原理上の問題として、「輸出された」商品にたいする需要がなかったのだとすれば、

6）*Ibid*., p. 204. 邦訳書、253 頁。

「輸入された」商品にたいする需要も、同様にありえない[7]」。

しかし、このようなスウィージーの見解について、バランは1953年5月15日の書簡で以下のように言っている。「小さな「学説上の（doctrinal）」問題が私の注意をひきつつあります。あなたは理論の205頁で、ローザにつらくあたっています。私見では、不適切な理由でです[8]」。そして、スウィージーから上記の箇所を引用した上で、スウィージーに対する批判を展開する。

「私にはこのことがわからない。(1)――これは重要でない問題である――いくらかの国内産出品の単なる輸出品や奢侈品の純輸入品――毛皮やダイアモンドやキャビア――は資本家階級の消費を増やすかもしれないし、このことが剰余価値の実現という問題を小さくするかもしれない。先ほども言ったように、このことはおそらく小さい。しかしながら、小さくないのは、(2)金が輸出品と引き替えに持ち帰られ、中央銀行の金庫室に最終目的地を見出す。(3)「債権（securities）」は持ち帰りうるかもしれない。言いかえれば、資本輸出が行われるかもしれない。たとえ、「非資本主義的」消費者が気づいてみると同じ国にいて(1)や(2)の状態にあり、その結果として不適切であったとしても、(3)を依然として引き起こしえるのです。「内部の資本輸出」――小作農の資産を「貸し出すこと（lending up）」、産業資本家の「非資本主義的」領域における土地、あるいはその他の資産の買い上げ、などです。その他の方法で超過剰余価値を取り除くことがもっと重要であるということ――具体的には、ローザの「第三の人びと」、言いかえればすべての種類の不生産的労働者の数と一人当たりの収入の増加――がおそらく見込まれる一方で、あなたが提示するように「非資本主義的」地域への輸出によって、そのいくらかをなすことにいかなる論理的な不可能性も存在していません。そうでないなら、私はあなたを誤解していますか、それとも私は間違っていますか、そうでなければ哀れな女性（poor girl）に手厳しすぎるのではないですか[9]」。

つまり、バランは不生産的労働者の数と一人当たりの収入の増加、そして「非資本主義的」地域への資本輸出が過少消費の問題を回避し、剰余価値の実現に寄与すると主張するのである。このようなバランの批判に対し、スウィージーは1953年5月24日の書簡で、自らの真

7）Sweezy, *op. cit.*, p. 205. 邦訳書、254頁。

8）Paul A. Baran to Paul M. Sweezy, May 15th, 1953, in：Baran, Nicholas, and Foster, John Bellamy（ed.）, *The Age of Monopoly Capital：Selected Correspondence of Paul A. Baran and Paul M. Sweezy, 1949–1964,* Monthly Review Press, 2017, p. 104.

9）*Ibid.*, p. 104.

意を説明する。スウィージーは以下のように言っている。

「しかし、このすべてが資本主義、あるいは非資本主義的地域、あるいは層について等しくあてはまることです。ローザがはっきりと主張しているのは、何らかの非資本主義的に存在する消費者（それによって彼女が本当に意味しているのは、再生産スキームの外である）には不思議な力があるということあり、彼女が完全に無視した問いというのは、これらの顧客（chaps）が購入するものにどのようにして代金を払うのか、ということです。私が言いたいのは、あまりうまく表現できないかもしれませんが、この全問題において、非資本主義的であることに何の利点もないということ、そして、もしすべてが資本主義的システムのとき、そのシステムが蓄積することができないならば、そのとき、そのシステムを非資本主義的環境のなかに配置しても、逃げ道にはならないだろう、ということです。このポイントは明らかに理論的なものであり、実際の問題として非資本主義的地域の開拓が重要でないことを意味するものではありません[10]」。

ここでまず第一に、スウィージーは資本主義と非資本主義という区別そのものが無効だというのである。資本主義であろうと、非資本主義であろうと、消費者は購入するためには貨幣が必要であり、交換を通してその貨幣を得るしかない。この事実は、資本主義的な拡大再生産のスキームの内か外かにかぎらず共通しているのである。そして第二に、資本主義であろうと非資本主義であろうと交換を通して貨幣を手に入れるという意味で剰余価値の実現に寄与できないのであれば、資本主義的な拡大再生産において需要はどこからも現われない、ということである。その点について、スウィージーは、バランが引用した箇所のすぐ次に、以下のように言っていた。

「この文脈では、「資本主義的」消費者と「非資本主義的」消費者との区別は、まったく無関係である。もしもこのディレンマが事実上のディレンマであるとすれば、それは彼女があてにした以上のことを示すことになる。すなわち、それは資本主義の崩壊が近いことを示すのではなくて、資本主義の不可能性を論証することとなろう[11]」。

スウィージーによれば、ルクセンブルクは、再生産表式の混乱を非資本主義的地域という逃げ道を見出すことで解決し、資本主義崩壊の論理を作りあげた。しかし、非資本主義的地域

10）Paul M. Sweezy to Paul A. Baran, May 24, 1953, in：*Ibid*., p. 105.
11）Sweezy, *The Theory of Capitalist Development,* p. 205. 邦訳書、255 頁。

にそのような「利点」はなく、この解決法は誤ったものであるというのである。そして、結局のところ、ルクセンブルクは資本主義崩壊の論理ではなく、資本主義の不可能性を示していたのである。

この後、この「ローザ・ルクセンブルク問題」についての論争は収束した。フォスターによれば、「スウィージーがあまりにルクセンブルクの資本蓄積批判を賞賛していたので、この論争はすぐにまとまった[12)]」のである。スウィージーは『資本主義発展の理論』においても、その批判にもかかわらずルクセンブルクを極めて高く評価していた。例えば、スウィージーは以下のように言っている。

「重大な分析上の誤謬にもかかわらず、そして公認マルクス主義の敵意にもかかわらず、ローザ・ルクセンブルクは、ドイツの運動において誰よりも真正のマルクス主義者であった。彼女は、狭い意味の経済理論家としてはいざしらず、史的唯物論者としては、批判者たちとは段ちがいの存在であった・・・・・・。ローザ・ルクセンブルクはマルクスと異なり「資本蓄積の無限性」を否定することによって、機械的崩壊の概念を樹立した。しかし、この二人が歴史的過程それ自体の性質について根本的には一致していたことを想い合わせるなら、この点は、結局において、比較的小さな意見の相違にすぎない[13)]」。

第２章　資本主義体制下での剰余価値の実現

スウィージーは『資本主義発展の理論』を執筆した後、二度にわたり、ローザ・ルクセンブルク論を執筆することになる。2度目のルクセンブルク論は短いもので、上記のバランとの論争の前、1951年に発表されたものである。これは、ローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』の英訳が出たときであり（後に『歴史としての現代』に収録）、ジョーン・ロビンソンが執筆した序文について、ルクセンブルクをケインズに引きつけることに終始したことを批判している。もっともルクセンブルクについては、新たな議論は見られず、ルクセンブルクが理論の混乱にもかかわらず、その現実に対する鋭敏な洞察を高く評価し、ルクセンブルクを賞賛している。

しかし、その後、1959年に発表されたローザ・ルクセンブルク論は、『資本主義発展の理論』ではまとまった形では検討されなかった、それゆえ『資本主義発展の理論』でのルクセ

12）Foster, John Bellamy, Inroduction, in：Baran, Nicholas, and Foster, John Bellamy（ed.）, *op. cit.*, p. 35.
13）Sweezy, *The Theory of Capitalist Development*, p.207. 邦訳書、257頁。

ンブルク論を補うことになる新たな議論を示している。このルクセンブルク論は、『資本蓄積論』のイタリア語訳の序文として執筆されたもので、前半部分はルクセンブルクを伝記的に説明し、後半部で『資本蓄積論』についての論評がなされている[14)]。この論考でスウィージーが提起した新たな問いは、ルクセンブルクがその誤りを認めず、自らの結論に固執した理由である。スウィージーは、以下のように言っている。

「ローザ・ルクセンブルクのひたむきな決断の跡はこの著書の全巻にわたっていくらでも見うけられるが、なぜ彼女はそれほどまでにこのような（ローザの不可能説が論駁されてしまう）結論に抵抗したのだろうか？　それはたんに知的な混乱にすぎなかったのか？　それとも、なにかそこには一層深いものがひそんでいたのか？　私としてはどうしても後者なのではないかと思う。ローザがおそれたのは、もしも純粋な資本主義での蓄積の可能性を認めれば、この体制が無際限に拡大しうることを認めざるをえなくなってしまうということだった。もし彼女がＡというならば、Ｂというよりほかに仕方がなくなり――そしてこのＢこそ、彼女がいうのを拒絶したばかりでなく心の底から虚偽と感じていたものなのであった[15)]」。

ここでルクセンブルクが心の底から虚偽と感じていたもの、決して認めてはならないと思っていた理論が、スウィージーによればトゥーガン・バラノーフスキーが証明しようとし、ヒルファーディングの『金融資本論』に引き継がれ、権威を獲得していた考えである[16)]。トゥーガン・バラノーフスキーは様々な工業や生産部門の間に均衡が保たれる場合にのみ、無際限な蓄積が可能であることを証明しようとした。そしてそこから、二つの方向の結果が導かれる。ひとつは、いわゆる「不比例説」であり、「不均衡」により恐慌が引き起こされる。今ひとつは均衡が保てた場合である。スウィージーは以下のように言っている。

14）日本語訳は1959年に発表されている（ポール・M・スウィージー、古在由重訳「経済学者、および革命家としてのローザ・ルクセンブルク」、『思想』岩波書店、419号、1959年5月）。後半の理論的部分については、英語版が後に『科学と社会』誌に収められた（cf. Sweezy, Paul M., Rosa Luxemburg's *The Accumulation of Capital, Science & Society,* Vol. 31, No. 4, Fall, 1967, pp. 474-485）。なお、以下での引用箇所はこの英語版の該当ページと翻訳書の該当ページを記す。

15）*Ibid*., p. 482. 邦訳書、78頁。

16）これはケインズが指摘した「セイの法則」に相当するものであり、トゥーガン・バラノーフスキーがマルクスの再生産表式を初めて用い、証明しようとしたという（Ibid., pp. 482-483. 邦訳書、78-79頁）。なお、トゥーガン・バラノーフスキーについては『資本主義発展の理論』においても詳細に検討されている（Sweezy, *The Theory of Capitalist Development,* pp. 165-173. 邦訳書、203-213頁）。

「第二は、たとえ資本主義の枠内でも、予見と計画化とが進めば恐慌は緩和されうるし、おそらくついには完全に克服されうるだろうということである。このことから、資本主義のトラスト化ならびに経済問題への国家干渉の増大こそ、ますます円滑化してゆく資本主義の時期の到来をつげるものだという結論までは、ほんの一歩にすぎなかった[17]」。

スウィージーによれば、ルクセンブルクは「不比例説」の修正主義的含意を認めることができず、それゆえに資本主義における蓄積不可能説にこだわった。これがルクセンブルクが自らの結論に固執した理由なのである。

ルクセンブルクの理論は誤っており、多くのマルクス主義者に受け入れられなかった。しかし、スウィージーにとって、ルクセンブルクが誤っていたということで問題が解決するわけではない。修正主義者が正しいわけでもない。スウィージーは以下のように言っており、ここにスウィージーの過少消費説が現われている。

「たしかに資本主義のもとでの蓄積という問題はあるのであって、この点についてはローザ・ルクセンブルクの本能はまったく健全だった。けれどもそれは可能性か不可能性かという問題ではないし、またたんに種々な生産部門の間の不均衡をふせぐという問題でもない。問題なのは、あまりにも急速に蓄積しようとするところの、すなわち、消費の増加率からみて正当または限度とされる以上のものを生産手段に追加しようとするところの、資本主義の根ぶかい傾向、抜きがたい固有の傾向である。ある意味では、たしかに、これもまた「不均衡」の問題にはちがいない。しかしそれは、資本主義の無計画性からおこって、あれこれの改良によって修復されるような不均衡ではない[18]」。

スウィージーによれば、ルクセンブルクと同時代のマルクス主義者で、修正主義者の立場によらず、そして蓄積不可能説にも陥らなかったのは、レーニンであった。レーニンはナロードニキに対する論争で蓄積不可能説を否定し、資本主義の無限な拡張可能性という命題をも否定した。そして、蓄積と消費の矛盾を、蓄積不可能性を示すものではなく、資本主義の歴史的・過渡的性格を示したものと理解したのである。

スウィージーは、ルクセンブルクの資本主義の枠内での蓄積不可能論を否定した。資本主義において、資本家、そして消費者の消費が増えてゆくことは可能であり、それゆえ蓄積も可能なのである。しかし、それでも過少消費という傾向は存在している。「資本主義の根ぶ

17）Sweezy, Rosa Luxemburg's *The Accumulation of Capital,* p. 483. 邦訳書、78 頁。
18）*Ibid.*, p. 484. 邦訳書、79 頁。

かい傾向」、「抜きがたい固有の傾向」として過剰な蓄積は存在するのである。資本主義は矛盾を抱えた体制であり、無限な拡張可能性を有するものではなく、歴史的・過渡的な体制なのである。

第3章　世界経済と帝国主義

スウィージーによるルクセンブルクの蓄積論批判には、主としてふたつの要点があった。第一に、蓄積された剰余価値にたいする需要がどこからくるのか、という問題である。スウィージーによれば、ルクセンブルクが主張した資本主義的消費者と非資本主義的消費者の区別は、この問いと理論的には無関係であり、剰余価値を実現するのに、資本主義的消費者であるか非資本主義的消費者であるかは関係がないというのである。もっとも、実際の問題として、そのことが非資本主義的地域の開拓が重要でないことを意味するわけではないし、非資本主義的地域において実現される剰余価値もある。そして第二に、資本主義の枠内での蓄積可能性についてである。スウィージーによれば、ルクセンブルクが主張した資本主義の枠内での蓄積不可能性は誤りであり、資本主義の枠内においても蓄積は可能である。もっとも、蓄積という問題は存在する。資本主義の枠内においても剰余価値の実現は可能であるが、過少消費の傾向は存在し、資本主義は崩壊に向かう論理を有しているのである。このように見てくれば、ルクセンブルクの誤りは、現実の世界を理解する枠組みとしては、大きな問題とはならず、極めて重大な問題提起を行っていることになる。そしてルクセンブルクの誤りから学び取り、彼女が切り開いたパースペクティブを理論的にも精緻化してゆくことが重要となる。とりわけ、資本主義世界と非資本主義的世界がどのような関係を結んでいるのか、そのとき「資本主義」はいかなる意味をもっているのか、ルクセンブルクの問題提起を受け継ぐ必要がある。そのような課題に応える試みの端緒を示していると考えられるのが、『資本主義発展の理論』第16章の「世界経済」である。ここで、スウィージーは封鎖的資本主義体制を越えた分析を展開する。

スウィージーはこれまでの様々な経済分析で前提とされてきた封鎖的資本主義体制はこれまでも存在しなかったし、これからも存在しないであろうという。どんな国も孤立して存在しているわけではなく、経済的に相互依存関係を築いている。その基礎的な関係はスウィージーによれば商品生産の交換関係である。当初は共同体間の交易、そして後には国際的分業に相応した国際的交換となる。しかし、資本主義が発達する場所が現われるようになると、単純な商品交換ばかりでなく、商品交換が資本の移動によって補充されるようになり、諸国

間の経済関係は複雑化する[19]。スウィージーは、資本輸出の一般的効果として、資本主義の発展速度は平準化される傾向があることを指摘している。スウィージーは以下のように言っている。

「資本輸出の一般的効果は、資本輸出国における蓄積過程の諸矛盾の成熟をおくらせ、資本輸出国における諸矛盾の発現を早めることである[20]」。

しかし、当然のことながら、このような経済的傾向は国家の活動により大きく影響される。スウィージーは以下のように言う。

「・・・・・・それは関係のある諸国の内部構造に反作用し、それを変化させもするだろう。したがってわれわれが世界経済について語るときには、われわれは、商品生産関係が（ますます資本主義的になるという形で）最大限度に広く拡大するということを意味するだけではなく、そのうえさらに世界経済の構成部分に質的変化が生ずるということをも含めていうのである[21]」。

国家の活動、すなわち経済政策の対立の結果、資本主義の発展速度が平準化される傾向は変容を余儀なくされ、世界経済の構成部分、つまり関係諸国家の内部には質的変化が生ずるのである。スウィージーはその変化を、競争期の経済政策、経済政策の転換、に分けて検討している。

競争期とは、およそ19世紀の最初の70年間を指す。この時期の経済政策には大きく2種類あり、自由貿易政策と工業生産のための部分的保護政策である。自由貿易政策をとるのはイギリス、部分的保護政策をとるのはイギリス以外の資本主義世界である。もっともこの政策の差は、その国の発展段階、関係国に対するその国の地位で決まるものであり、保護主義政策を支持する者も、いわゆる幼稚産業保護のためである。スウィージーは自由主義が競争的資本主義のイデオロギーをなすといって差し支えないと指摘している。

それでは非資本主義地域との関係はどうか。16世紀から18世紀の植民地主義では、世界規模の植民地帝国を建設することで、植民地貿易に従事する商人を保護し、外国商人との競

19）スウィージーは、「価値、剰余価値率および利潤率を支配する諸法則は、どの程度まで世界経済に適用できるであろうか」と問い、それぞれの理論について、簡潔にその適用可能性を問うている（Sweezy, *The Theory of Capitalist Development,* pp. 289ff. 邦訳書、355頁以下）。

20）*Ibid.*, p. 292. 邦訳書、359頁。

21）*Ibid.*, p. 293. 邦訳書、360頁。

争の排除し、本国が利益を独占できるような交易条件を植民地に保証させた。しかし、競争期の植民地政策は大きく変化した。重商主義的な制限を取り払い、自由貿易を推進した。イギリスの商品は世界を征服するのに排他的な特権は必要なく、帝国の維持を不必要と考える者もいたのである。また、資本輸出はまだ重要性を持つに至っていなかった。

このような経済政策に変化が現われたのが19世紀の最後の四半期であり、レーニンのいう「帝国主義」時代の到来である。経済政策が変化した3つの基本的要因として、スウィージーは、「⑴他の諸国、ことにドイツとアメリカ合衆国が、イギリスの産業的優位に挑戦しうる地位まで興隆したこと、⑵独占資本主義の出現、⑶もっとも進んだ資本主義諸国における蓄積過程の諸矛盾の成熟」の3つの要因をあげており、これらが絡み合って経済政策が変化した。

第一に、独占資本主義の出現により、供給制限が始まり、資本蓄積が生産設備の拡張ではなく、対外投資にはけ口を求めるようになった。そのさい、国家は「補助金」を与えることになる。この「補助金制度」により、保護主義も変化し、弱者の防衛手段から強者の攻撃武器になった。そして外国に足場を求める資本は、政治的支配の下での領土拡張を要求する。こうして本国の独占者の超過利潤の源泉を確保するのである。ただ、スウィージーによれば、この場合、追加される領土が工業的に先進地域か後進地域であるかは問題ではない[22)]。

第二に、イギリスに挑戦しうる国々が現われた結果、各国は自由貿易ではなく帝国の結びつきを強めることとなった。スウィージーによれば、これは他の帝国主義国に対する防衛的、先行的性格のものである。この性格が19世紀末の未占有部分の争奪戦に重要な役割を演じたのである。

第三に、先進資本主義国において蓄積過程の諸矛盾が成熟し、利潤率の低下傾向と過少消費傾向がますます大きくなったことで、先進資本主義国は資本輸出を強めることとなった。賃金が低く、その結果利潤が大きい後進地域に資本が輸出されるようになるのである。スウィージーは以下のように言っている。

「後進地域では、労働供給の潜在的過剰と工業化の低水準が、少なくとも当分の間は過少消費の危険を取り除くのだ[23)]」。

そして、この後進地域への資本輸出の増大が、積極的な植民地政策を必要性とするのである。

22）なお、スウィージーは、ここにルクセンブルクらとの相違を指摘している。スウィージーは以下のように言っている。「ローザ・ルクセンブルクやその一派の帝国主義理論に見られる大きな弱点の一つがここにある」（*Ibid.*, p. 321. 邦訳書、393頁）。

23）*Ibid.*, p. 304. 邦訳書、372頁。

第一の理由について、スウィージーは以下のように言っている。

「しかし、後進地域においては資本を受け入れるあらゆる準備ができていると考えてはならない。土着民は彼ら自身の慣習的な生活様式をもっており、また乏しい賃金で外国資本の御用に応ずる熱意をもつなどということからは程遠い。それゆえに、これらの地域は資本主義国家の支配下におかれねばならず、そこに資本主義的生産関係の発達に好都合な諸条件が無理にもつくり出されねばならないのである[24]」。

つまり、資本主義的生産様式を、本国の資本家の資本輸出に有利なように形成する役割を担った帝国主義政策がとられるようになるのである。第二の理由は、独占資本の競争の激化である。資本家は資本輸出がもっとも有利な投資を狙って競争し、そのために自国の政府に援助を求めるのである。その最も容易な方法が、スウィージーによれば、後進地域を植民地化することなのである。

そしてこの植民地政策により、植民地化された後進地域は大きく変容する。スウィージーによれば、植民地化、資本輸出が後進地域の急速な工業化に寄与するわけではない。資本が入るのは、公共事業、公益事業、自然資源開発などの分野での政府保証貸付であり、先進工業国からの資本輸出とは競合しない分野である。その結果、後進地域の経済は一面的な発展となる。スウィージーは以下のように言っている。

「土着ブルジョワジーが出現し、土着産業の発達を育成助長しようとはするが、障害は圧倒的に大きく、その進歩はせいぜいのところ緩慢である。しかもその間、廉価な輸入工業製品による手工業産業の破壊は、土着民の多くを農業に追いこむ。このようにして、われわれは、後進地域の基本的な経済的矛盾であるところのますます激化する農業危機の発生をみるのだ。土着ブルジョワジーと土着民大衆との利益はともに、先進諸国の資本の要求の犠牲に供される[25]」。

帝国主義政策により、後進国の経済は一面的な発展となる。帝国主義以前から存在する手工業は破壊され、土着ブルジョワジーと土着民大衆は、帝国主義国の独占資本の資本蓄積の犠牲となるのである[26]。

24）*Ibid.*, p. 304. 邦訳書、372 頁。

25）*Ibid.*, p. 305. 邦訳書、374 頁。

26）スウィージーは後に土着ブルジョワジーについての評価を変えつつ、以下のように言っている。「なぜこれほど多くの低開発諸国が、一見したところ自ら進んで帝国主義のくびきの中にとどまり、そして

ローザ・ルクセンブルクは、封鎖的資本主義の前提を超えて、非資本主義地域が資本主義地域の資本蓄積を可能にすることを論証した。その論証は誤りであったが、非資本主義地域が資本主義地域の資本輸出の対象となり、資本蓄積の源泉となることは間違いないのである。

おわりに

スウィージーは、ルクセンブルクの理論について、多くの批判を向けながらも、そのパースペクティブを受け入れつつ、自らの理論を構築していった。そして、本稿で検討したいくつかの論考から長い時間がたった1997年、スウィージーは短いエッセイのなかでルクセンブルク、それとともにレーニンに触れることとなった。そこでは、マルクスを継ぐ者として、レーニンではなくルクセンブルクを取り上げている。マルクスは十分にグローバル化した資本主義が実現可能かどうかという問いを立てることはなく、その問いは後に次ぐ者たちに残された。それを引き継いだのが、ルクセンブルクである。ルクセンブルクによれば、資本主義はその初期から非資本主義的な場所に進出することで存続してきたし、そうすることでしか存続することはできなかった。それゆえ資本主義は非資本主義的な場所を使い尽くしたとき、不可避的に最後の転機を迎えるとした[27)]。スウィージーは新たにルクセンブルクに触れ、この理論を高く評価するのである。このようなルクセンブルクの立場とは対照的に、レーニンが問題としたのは、全体としての資本主義ではなく、非資本主義的地域を含めた構成単位の一群としての資本主義であり、強者が弱者の支配を求める競争としての帝国主義であった。

このスウィージーの主張の背景には現在の世界状況があるように思われる。冷戦の崩壊、グローバリゼーションの進展のなか、資本主義そのものを常に問題としたローザ・ルクセンブルクがスウィージーの中でさらに重要性を増しているのである。第2次大戦後の一時的な先進国の安定すらなくなった今、ルクセンブルクの慧眼がますます明らかになってきたのか

自らの発展の望みを先進諸国からのいろいろな種類の援助に託し続けているのかという、もっともな疑問がでてくるであろう」と問い、アンドレ・G・フランクを引用しつつ答えている。フランクによれば、先進国（アメリカ）は、植民地（ブラジル）の一部の者に利益と権力を与えるなどして植民地を維持し、後に一種の債務奴隷にした上で、搾取関係が必要で望ましいものであるとする経済学、イデオロギーを供給する（Sweezy, Paul M., Obstacles to Economic Development, Feinstein, C., H.（ed.）, *Socialism, Capitalism and Economic Growth*：*Essays Presented to Maurice Dobb,* Cambridge University Press, 1967, p. 196f. 本間要一郎訳「経済発展を妨げるもの」、水田洋他訳『資本主義・社会主義と経済成長』筑摩書房、1969年、237-238頁）。なお、フランクをめぐるバランとスウィージーの見解の相違については以下の拙稿を参照されたい。Cf. 古松丈周「独立社会主義者と新従属理論：ポール・A・バランのアンドレ・G・フランク批判より」、旭川大学経済学部『旭川大学経済学部紀要』第75号、2016年3月。

27）Sweezy, Paul M, More（or less）on Globalization, *Montly Review,* 49（4）, September 1997, p. 2.

もしれない。

もっとも、ルクセンブルクの誤謬は依然として残る。しかし、それは大きな問題ではない。その後、その問題意識を受け継ぎながら、理論的発展が見られるからである[28)]。そして何より、これまで論じてきたように、ルクセンブルクはその理論的誤謬にかかわらず、その指し示した方向性は正しかった。資本主義の枠内で蓄積が可能であろうとも、資本投資のはけ口としての非資本主義的地域、非資本主義的層の人びとが資本主義に急速に統合されるなか、資本主義はこれから存続しえるのか。この問いが再び現実のものとなったのである。

28）詳しくは以下を参照されたい。Cf. 植村邦彦『ローザの子供たち、あるいは資本主義の不可能性：世界システムの思想史』平凡社、2016 年。